

聴覚障害児（者）用字幕番組作製における字幕の 最適性に関する実験的研究（その5） ——感想文の分析——

岡田 明

研究の目的はテレビ視聴後の感想文を分析し、聴覚障害児の視聴解と感想の状況を分析することにある。

テレビを視聴し、理解し、鑑賞、批判したものを作文力を中心とする表現力によってまとめたものが感想文である。ここでは主に視聴解との関連から感想文を分析した。

健聴児の読書感想文と比較したが、聴覚障害児では作品の深層にせまり、主題にせまって感想をまとめることがあまり見られなかった。

キーワード：字幕 聴覚障害児 感想文

文字多重放送とはテレビ放送の電波に重畳して文字などを送る放送をいう。今までにそれに関して次のようなことを研究してきた。

- 1) 単語、文、文章といった字幕水準と字幕挿入率との関係を分析すること。
- 2) 字幕挿入率を一定にして字幕水準と呈示時間との関係を検討すること。
- 3) 字幕挿入率と呈示時間を一定にして字幕水準と挿入の型（つまりオリジナルのままと修正字幕）との関係の検討。
- 4) 挿入率と字幕水準を一定にして理解を促進させるための付加情報の効果を検討すること。

被験者は実験ⅠからⅣまでランダムに各約160人を割り当てた。番組はNHK教育番組『明るい仲間』より「ひとりぼっち」と「うさぎがいない」を選定した。この実験用テープのセリフを再現し文字化した。字幕挿入にあたってはSONY製機器を利用した。各実験は集団検査で実施した。教示を与え、評価用紙を配布し、テレビを視聴させ、理解力検査を実施した。テレビ視聴にあたっては音声はしぼり字幕と映像だけで視聴させた。

目 的

本研究の目的はテレビ視聴後の感想文を分析し、聴覚障害児の「視聴解」の状況を分析することにある。

視聴解とは読解に対応させて筆者の創造した術語で、映像認知にもとづく理解の状況を示すものである。

映像認知には収束的な思考と共に拡散的な思考も働く。2つの思考様式の統合されたところに感想が産出される。そこで、ここでは映像認知にもとづく視聴解のみでなく、感想そのものをも分析することを研究の目的とする。

方 法

テレビを視聴し理解し、鑑賞、批判したものを作文力を中心とする表現力によってまとめたものが感想文である。感想文は、4つのタイプに分析することができる。①表現に即した感想、②特定の場面に即した感想、③作品全体のすじに関係した感想、④主題に即した感想である。ここでは、主として視聴解との関連から感想文を分析することにする。被験者は聴覚障害児が小学部6年20人、中学部3年17人である。健聴児は小238人、小338人、小440人、小538人、小641人である。

* 筑波大学心身障害学系

表1 記述式検査の分析項目

推移 (場面)	① 班作りをすることが決まった
	② クラスでどのような班作りをするかについての話し合い
	③ 家で班作りの報告
	④ 再びクラスで班作りの話し合い
	⑤ ひろゆき君の家の様子
	⑥ 好きな者同士で班をつくることになった
す じ	1 ポイントがおさえられていない, 全体が書いていない
	2 一部は書いてあるが, ポイントがおさえられていない
	3 どちらともいえない
	4 一部が書いてあり, ポイントがおさえられている
	5 全体が書いてある, ポイントがおさえられている
主 題	主題が書いてあるか
	1 書けていない
	2 ふつう
	3 よく書けている

テレビ視聴後に次の教示を与えて感想文を書かせた。「今、テレビジョンを見ましたね。あなたが見て、感じたり、考えたりしたことを書いて下さい。」

健聴児にはテレビを視聴させることができなかったもので、読書感想文を求めた。テレビの視聴内容と読書内容は難易度で統制した。つまり共に小学校中学年向きとして規定されているものである。『明るい仲間』はNHKで小学校中学年向きとして指定されており、読書材『たっちゃん』は日本読書学会で中学年向きとして指定されているものである。

聴覚障害児が書いた感想文の分析の観点を次に示す。

「推移」では場面が示されており、「すじ」と「主題」は評定法で評価する場合の観点が示されている。

健聴児には読書材として『たっちゃん』を使用した。なんとかして、兄たちの仲間に入れてもらいたいのであるが、幼いが故に馬鹿にされ、なかなか仲間に入れてもらえなかった「たっちゃん」を主人公にした話である。読書感想文をつづらせる時には次のような教示を与えた。「今、たっちゃんのお話を読みましたね。読んで、どんなことを感じたり考えたりしましたか。あなたが読んで感じたり、考えたことをなんでもよいから書いてく

ださい。」

次に、読書感想文の1例をあげてその分析の仕方について述べる。[]の中に分析した項目が書かれている。

たっちゃんには、兄のよしお君たちが外野しかやらせてくれない。それも、ちっともボールが飛んでこないのだ。長い間待ってもボールはこない。[場面] たっちゃんは、さぞかしじだんだをふんだことであろう。

ところで、よしお君とベスは仲がわるい。ここで、たっちゃんがベスのところへ行ったのだ。ベスは、たっちゃんを助けようとしたわけでもない。[場面] けれども、たっちゃんから見れば、ベスに助けられたと思ったことだろう。それがきっかけで野球にはいれたからである。

[すじ] よしお君は、いつもいじわるばかりしているけれども、ほんとうは弟思いなのかもしれない。[場面] ボールをたっちゃんに取ってもらったお礼に、すなおにぼうしまでとってあやまるなんて、私の兄には見られない光景だ。とてもすなおだと思う。[主題] 私などもきょうだいなかよくし、小さな子どもを遊びに入れてやらなければならないと思った。[表現] アイスcreamのような雲を見ていたといういいまわしがうまいと思った。

ここでは項目数は6、種類は4となっている。

表2 推移の平均得点 (聴覚障害児)

	小学部	中学部
	オリジナル	オリジナル
	文	文
M	1.7	1.9
S.D.	0.88	0.93
N	20	17

表3 聴覚障害児における「すじ」の評定値の分析

条件 評定値	小学部	中学部
	オリジナル	オリジナル
	文	文
1	60(%)	18(%)
2	20	24
3	20	47
4	0	12
5	0	0
N	20	17

結果と考察

推移は6場面から成っており、6点を満点とした。両学部ともかなり得点が低い。1つの場面が記述されていれば1点を与えて総計した。小、中学部間には有意差がないようである。

表3はそれぞれの評定値に入ったものの百分率を求めた。中学部になるとかなりの発達が見られるが、それでも中央値は評定値が3である。

表4も評定値の百分率を求めた。小学部では1に、中学部では2に評定値が集まっている。

表5は、記述が単語レベル文レベル文章論レベルでも感想が見られれば1つのゲシュタルトを形成されているものと判定し、1点を与えた。表5は平均値と標準偏差で示してある。

聴覚障害児では、小学部ですじの評定値は1が多い。主題も1が多い。中学部ではすじが3、主題は2になる。

健聴児では、小学校で2年生から主題に即した感想があらわれている。

図1には感想産出のダイナミズムが示されている。

表層には映像や印刷されたシンボルが示される。

表4 聴覚障害児における「主題」の評定値の分析

条件 評定値	小学部	中学部
	オリジナル	オリジナル
	文	文
1	90(%)	47(%)
2	10	41
3	0	12
N	20	17

表5 健聴児の読書感想文の3つの面からの分析 (平均と標準偏差)

		場面	すじ	主題	N
2年	M	4.3	1.5	0.7	38
	S.D.	2.7	0.8	0.3	
3年	M	4.3	3.1	0.6	38
	S.D.	2.8	2.1	0.2	
4年	M	5.5	3.5	0.8	40
	S.D.	1.1	1.8	0.5	
5年	M	5.3	4.1	1.2	38
	S.D.	5.2	2.9	0.8	
6年	M	4.7	4.1	2.6	41
	S.D.	2.3	3.2	0.8	

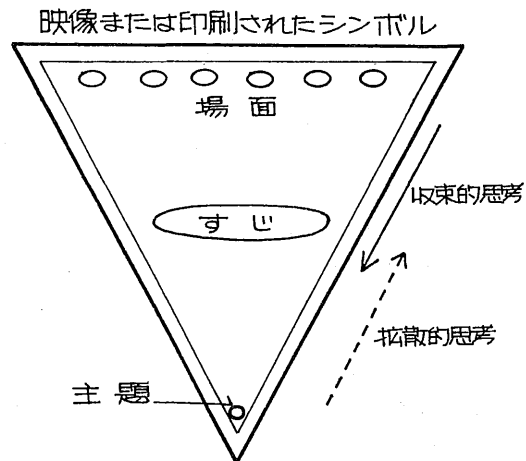


図1 感想産出のダイナミズム (岡田明)

これらの認知にもとづき「場面」が認知され文脈が形成されていく。これらが統合されたものが「すじ」の認知になる。これが、収束的思考でにつめられると「主題」の認知に発展する。

しかし、映像認知などにともない「私はこう思う。私ならこうする。」という拡散的思考がはたらく。これら2つの思考様式が止揚されて感想に発展するのである。

主題は、隠された意味implied meaningでもある。表層にはあらわれず、主体の認知の中に蔵される。

ここまで発展することがろう教育には必要なのである。健聴児にはそれが小学校低学から現れるのに、ろう児にはそれが現れていない。今後の教育に期待しなければならない点であろう。

Smith (1964) は創造的な読みを次のように規定する。それは読むことにより読み手の経験を開発し、獲得した意味を新しいものに再構成することである。読み手の経験が開発されるのは、いうまでもなく読書材の刺激に対する反応として現れるものである。これはまさに感想の基礎だと言えよう。

一方、新しいものに再構成する場合には、当然、読み手主体の態度や考え方などが強化されて、一段と鮮明な構造を有するようになるものである。新しい経験と自己の過去経験の展開が、同一個人のなかで行なわれることによって弁証法的な展開があり、創造の契機が与えられると考えてよいであろう。

創造的な読みとは、読み手が新鮮でまたオリジナルなやり方で書き手の考えを吸収したり、それに反応したりする読みである。

筆者は創造的な読みが感想の基礎だと考えるものである。

ところで、創造的な読みのレベルはどう分析されるべきであろうか。

新鮮でオリジナルな仕方、印刷されたシンボルの意味を吸収したり反応したりする読みが創造的な読みであるとすれば、読みの創造性にはいくつかの水準が考えられることになる。

子ども自身がみずから求めて、彼ら自身にとって新しい読書材を読むときには、それらは彼らにとって新しい経験であり、広い意味で創造的な読みが行なわれているといてさしつかえない。これらが第1のあるいは最も基礎的な読みの水準である。

思考様式には、大きく分けて収束的思考と拡散的思考がある。読書過程における収束的思考をここでは第2の水準に位置づける。

Gray (1956) は読書により吸収する意味を3つに分類している。1つは文字どおりの意味(literal meaning)であり、2つは関連した意味(related meaning)であり、3つは隠された意味(implied meaning)である。

しかし創造性という視点からは、第1の文字どおりの意味には、創造的な読みが立ち入るすきはないと思われる。そこで、関連した意味と隠された意味が問題となる。そこでは、1つは読解力やそのスキルが創造されると同時に、自己の経験が拡大し、自我が強化されたりするうえで創造性が開発されると思われる。つまり、主題を把握したり、自己と読み物の内容を関連づけたりする力が開発され、同時に自己の考え方が弁証法的に発展したり、それが強化されたりもするであろう。

第3の水準は、拡散的思考を基礎にした読みの創造の水準である。作者の主張や情調に同調する場合には鑑賞という形をとり、それらに反発する場合には批判という形をとる。それらの読解内容をふまえて拡散する、またはそれに反応する思考形式であるといえる。ここに最高の創造性の水準が存在するのである。というのは、この水準で最も読み手のユニークな感想が表白されるからである。

これが人格形成への水路づけの契機を提供している。読書による人格形成においては、何が書いてあるのかが大切なのではなく、読解した意味内容に対する主体的反応が重要なのである。さらに読解後に読み手の態度に進歩的変容がみられれば、読みの創造性は最も望ましい形で発揮されたといえるであろう。

収束的思考と拡散的思考は相互に反対の方向を示しており、読解過程つまり収束的思考過程においても若干の拡散的思考がみられるのである。これが感想表白のエネルギーになる。

創造性指導の原理はどこに求められるべきであろうか。

創造性の指導においては、拡散的思考過程が強調され、何か新しいユニークな結果を生産することが奨励されなければならない。感想文には、いろいろな扱いが可能であるが、そのような観点からは個性的な感想文に対しては、教師は常に心理的な賞を与えるように心がけるべきである。

創造過程にうまく動機づけられた緊張(motivational tensions)も必要である。

教師が後退して、子どもが未知に当面する事態を構成することも大切であろう。自己選択や主体の追求の原理は、ここでも生かされなければならない。創造的であればあるほど、結果は予測不能になるものである。

読み手は、みずからの考えや思想を生産し、それらを発展するように奨励されるべきである。これは視聴解ないし読解中と視聴解ないし読解後の拡散的思考の重視にほかならない。反応のユニークさ、個性、オリジナリティが強調され、報酬が与えられることが望ましい。

創造性においては、過程は結果と同じように重要視されなければならない。そのためにも視聴ないし読書過程は重要な意味をもって来る。学習過程全体を通じて自発的学習 (selfinitiated learning) が強調されなければならないであろう。

さらに、建設的な批判や評価の技能が発展させられるようであればならない。

創造性は教え込むことができない。強化によってその再現を確保し、創造性を起こさせるようにするための条件をととのえることができるのみである。

感想指導では、いかに創造的読みをさせるかが大切だから、つぎに、読みの創造性とその指導の問題を考えてみよう。

読みの創造性においては多くの技能を必要とする。Smith (1964) はそれらを次のようにまとめた。認知の正確さ、構成力、独立性、連想の流暢さ、表現の流暢さ、評価能力、問題に対する感受性、抽象化能力、分析能力、把握力、集中力、経験の高さ。これらは、すべて障害児の読みの指導において重要なことだと言えよう。

感想は、創造的読みでなくてはならない。ろう児には、その点が欠けていることを指摘しておきたい。

まとめ

本研究は、テレビ (字幕挿入) 視聴後の感想文に焦点をあて、聴覚障害児 (小6:20人、中3:17人) の視聴解 (映像認知にもとづく理解の状況) 並びに視聴解との関連から感想そのものを分析することを目的とした。

分析の対象は感想文であり、1) 推移 (場面)、

2) すじ、3) 主題の3つを主な分析項目とした。推移項目は6つの場面の叙述の出現数、すじ及び主題項目ではそれぞれ5点法、3点法のSD評定である。

結果の解釈にあたり、健聴児の読書感想文を比較対象とした。その結果、聴覚障害児は6点満点中2点に満たない (平均) 場面叙述の少なさ、中3でも評定値3に留まる「すじ」の不完全さ、そしてそれ故に収束的思考の帰結ともいえる主題にまでせまることの困難さを示した。隠された意味である主題にせまるためには、収束的思考と共に拡散的思考をも必要とする。これら2つの思考様式が止揚されて感想に発展するといった感想産出のダイナミズムからみれば、聴覚障害児は拡散的思考にもとづく創造的な読みに問題があるといえよう。

文 献

- 1) Gray, W.S. The Teaching of reading and writing. Unesco. 1956
- 2) King, C.M. et. al. Reading and deafness. College-Hill Press. 1985
- 3) 岡田 明 弱視児の読みに関する実証的研究 学芸図書 1979
- 4) 岡田 明, 都築繁幸, 佐藤至英, 浜角典子 聴覚障害児 (者) 用字幕番組作製における字幕の最適性に関する実験的研究 教育心理学研究 33, 1, 22-32. 1985
- 5) 岡田 明, 都築繁幸, 佐藤至英 聴覚障害児 (者) 用字幕番組作製における字幕の最適性に関する実験的研究——修正セリフの効果の検討—— 読書科学 30, 1, 10-18. 1986
- 6) 岡田 明, 都築繁幸, 佐藤至英 聴覚障害児 (者) 用字幕番組作製における字幕の最適性に関する研究——付加情報の効果の検討—— 読書科学 30, 2, 80-87. 1986
- 7) Smith, F. Understanding reading. Holf, Rinehart and Winston. 1971
- 8) Smith, J.A. Creative teaching of reading and literature in the elementary school. Prentice-Hall. 1964
- 9) Vogel, S. Syntactic abilities in normal and dyslexic children. Baltimore: University Park Press. 1975

Summary

An Experiment Study on the Optimum of Producing Captioned Television for the Deaf (No. 5)

—An Analysis of the Appreciated Composition—

Akira Okada

The purpose of this study was to assess the appreciated composition after getting additional captioned information by television.

Twenty deaf elementary level students, 17 deaf secondary students and 190 elementary level normal students who were not hearing impaired participated in this experiments. The story program was selected from materials prepared by NHK (Nihon Hoso Kyokai) for elementary school students.

After viewing the captioned program the subjects were administered a test of appreciated composition.

The results were as follows: the composition about theme of story by hearing impaired children was inferior and less than that written about theme of story by normal children.

Key Word : caption hearing impaired children appreciated composition